■会議録

【名　称】	【日　付】	【出席者（ 敬称略、名簿順 ）】
第9回印西市景観計画等策定委員会 第9回印西市景観まちづくり市民懇談会 第3回印西市景観計画等策定庁内会議作業部会（合同会議）	H30.1.25（木） 13:30～16:00	策定委員会委員：木下、滝沢、石川、板橋、森田、浅賀、森、下田、澤、山口、安部井　(11名) 市民懇談会：村沢、飯田、山﨑、岡田、樋口、古俣、小名木、笠井、下田、滋賀、山口 作業部会：新岡、鶴岡、星野、立原、杉山、五十嵐、板倉、浅野肥田、塚本、小川、増田、根本 事 務 局：川嶋、藤崎、篠原、堀内 ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ(LAU)：吉岡、牧野 傍 聴 者：2名
【内　容】 印西市景観計画（案）について 基調講演 意見交換	【場所等】 印西市役所3階 大会議室	

【目　的】：印西市景観計画策定に向けて、案に対する意見交換を行う。

【内　容】：１．議事

（1）印西市景観計画（案）について

２．基調講演（景観まちづくりについて、色彩について）

３．意見交換

４．その他（連絡事項）

【配布資料】：次　第

資　料1：印西市景観計画等策定スケジュール

資　料2：印西市景観計画（案）市民意見公募の意見概要

資　料3：印西市景観計画（案）

資　料4：印西市景観計画等策定委員会名簿

資　料5：印西市景観まちづくり市民懇談会委員名簿

資　料6：印西市景観計画等策定庁内会議作業部会名簿

１．議事

（1）印西市景観計画（素案）について

□ 資料3　『印西市景観計画』（案）について説明したのち、意見交換を行った。

■ 意見概要について以下に示す。

①パブリックコメントについて

(委　員)　パブリックコメントのアナウンスは、どのように行ったのか。

(事務局)　広報とホームページに掲載するとともに、出張所、公民館、図書館に閲覧できるよう資料を置き、意見回収箱も設置した。

(委員長)　景観計画のパブリックコメントは、意見が出ない場合が多い。積極的に周知しないと、関心も高まらないであろう。

意見に対する回答はどのように行うのか。

(事務局)　この後、回答を公表する。

(委　員)　「広報いんざい」は、月2回発行されている。広報を活用した周知を定期的に行うなど、努力してほしい。市民から見えにくいところで作業が行われてきたのではないか、という思いがある。

(委員長)　大切な指摘である。今後は、積極的に情報を出していってほしい。

（事務局）　景観計画の周知に併せて、今回のワークショップの様子も今後広報に掲載したいと考えている。

（委員長）　是非、市民のみなさんが作業している写真を掲載するなど、伝わるようにしてほしい。その他計画に対する意見はないか。

（委 員）　（意見なし）

（委員長）　それでは、計画については、認めていただいたということとしたい。

▲第９回策定委員会の様子

２．基調講演

（１）「景観まちづくりのこれから」木下委員長（千葉大学大学院園芸学研究科教授）

▲木下委員長の講演の様子

- ブータンでは、新しい建物も伝統的な様式を取り入れて街並みがつくられている。ブータンでは制度ができて、国民の意識を高めながらこれから進めようとしている。これまでは国王からのトップダウンであったが、今後はボトムアップ型になる。
- 小樽では、運河の大半を埋め立てる道路計画があったが、これに反対する市民が立ち上がり、10 万人もの署名を集め、地道な作業の市民運動が進められ、埋め立て計画が撤回された。そして今や観光客が年間 500 万人訪れる。なぜ運河を残そうとしたのか。それは、他にないから、珍しいからではなく、そのまちで生きていく者にとって、なくてはならないから残し活かすということである。つまり運河は小樽にとって必要不可欠なものだからである。これは景観と生活がどう関わりあうかということを考えることになった。
- 静岡市の蒲原地区は、東海道の宿場町であったが、古い民家が空き家になったり、取り壊されたりしている。また子どもの数が少なくなっていた。ここでも住民の女性たちが立ち上がり、旧東海道沿いの街並み保全に取り組み、旧五十嵐邸の買取を行政に働きかけて保存した。また、築 150 年の旧岩辺邸が空き家になるという問題も出てきた。そのままでは不動産マーケットのため更地になってしまう。そこで、購入した。この岩辺邸では活用のためのワークショップを実施しているが、今回楽しむ会が設立され、管理を行うことになった。またイベントも行っている。このように、自分たちの生活に活かしていること、楽しむことが大切である。景観と日常の生活の関わりができているということである。

- 20 世紀のオピニオンリーダーであった丸山真男は、民主主義は、理念、制度、運動の三位一体で進めることであると力説している。

  印西の景観まちづくりを考えると、理念や制度はできたが、これをいかに運動として浸透させるかが問われている。市川市は、景観法ができる以前から景観形成に取り組んでいるが、市民に浸透しないということで苦労していた。そのために「まち並み景観づくりハンドブック」を作成した。これは身近なことからも、景観まちづくりを進めることができるということを重視して作成されたものである。市民としてどのような行動ができるかという視点が重要である。

《質問》

- 小樽の運河の保全で、「生きていく」というときの「生きる」は、通常とは異なる意味があるのではないか。

《応答》

- 歴史は、過去から今につながるもので、そして今の時点に私たちは生きている。その意味で運河は心のよりどころ、アイデンティティーであるということであろう。それによって生かされているという意味でとらえている。

（2）「景観における色彩の役割」滝沢委員（(株) 日本カラーデザイン研究所）

▲滝沢委員の講演の様子

- 色の果たす役割には、機能的役割と感性的役割があるが、色によって識別するなど、身近に使われている。
- まちの中の色は、まちの印象の８割を決めているのではないかと考えている。それだけに大切である。
- 美しく快い景観をつくるためには、色を通して風土性や地域性を大切にすることが重要である。また、色は時代とともに意識が変化してきている。現在は爛熟期で、洗練、上質化が優先されており、風土の色を大切にする動きがみられる。
- 景観とは風土イメージの集積したシーンであり、生活の歴史の変遷の要約である。美しく快い景観をつくるためには、次の４つの条件が必要であると考えている。１つ目はエコロジカルな条件、２つ目はサイコロジカルな条件、３つ目はヒストリカルな条件、４つ目はエコノミカルな条件で、これらを考えることが必要である。
- 風土性を発見するためにはフィールドワークが大切である。フィールドワークで地域の色をみるときに、自然環境色、社会環境色（公共建築物の色、バス・タクシーの色など）、文化環境色（伝統的な建造物、工芸品、祭りの衣装、名産物のパッケージなど）の３つの色を調べることが重要である。また、遠景、中景、近景で色の見え方が変わる。
- 景観色彩で用いられているマンセルシステムは、色を定量的に管理するもので、色相・明度・彩度で表す。明度は実際には 1～9.5 の数値となる。彩度は 0 が無彩色となる。彩度が 0.5 の街並みはスタイリッシュであるが、クールで無機質なイメージとなる。彩度 1.5 となると色相の違いが出てくる。
- 景観におけるマンセル 3 属性の役割をみると、色相は建築物としてのなじみやすさに影響する。明度は眺望に大きく影響を与え、彩度は街並みの秩序形成に影響を与える。

- 美しく記憶に残るまちにはコンセプトがある。統一感はある程度は必要であるが、その中の微妙な多様性が重要である。
- 景観は個人のものではなく、公共のものという認識が必要である。また色は単独では存在しないので、まわりの環境との関係で考える必要がある。
- 基準値内で収まっているから良いということではなく、より印西市らしい推奨色を決めることが次のステップとして必要となる。
- 景観は建築物に目が行きやすいが、路面や看板も重要である。それを含めて質を高めることが必要である。

３．意見交換

基調講演を踏まえ、４班に分かれて、今後の景観まちづくりに「生かせそうなこと、実施したいこと」について意見出しを行った。

各班の意見出しの内容について別紙に示す。

▲A班

▲B班

▲C班

▲D班

（講評）木下委員長

各班の発表の後、最後に木下委員長より、たとえば草刈りは地域コミュニティの中で進めることや、歴史的な資源のＱＲコードなどを活用した案内、フォーラムなど市民が集まる機会を年１回はつくることなどが提案された。

４．その他

次回策定委員会では、景観条例について検討する。日程等は確定次第通知する。

以上

■意見交換のまとめ

	A班	B班	C班	D班
景観まちづくりについて（今後の景観まちづくりに「生かせそうなこと、実施したいこと」	• 市川市のような景観ハンドブックはわかりやすい（グループでも、個人でも） • 景観ガイドラインや公共施設景観ガイドラインをつくる（パブコメを積極的に行い、意見を収集） • 建築協定を利用する • 景観上マイナスになっている場所の具体的な改善 • 各分野に多くの団体単位で具体化 • 良好な景観づくりのモデル • 取り組んだ結果を広報、HPで紹介 • 小中学校で講演 • 大学と連携 • 情報発信の方法（景観づくりの経過をいかに発信して市民に伝えられるか） • 景観に関する問い合わせ	• 景観まちづくり賞をつくる（美しい景観や景観まちづくり活動をしている団体を自薦、他薦を含めて表彰する→モチベーションアップ　1年に1度くらいの頻度） • 学校単位でお互いの景色自慢（未来を担う子どもたちの意識を醸成する） • 景観学習（小中学校を対象にまち歩きを通して、印西市の魅力を発見し、印西市のアイデンティティ（印西らしさ）を考えてもらう） • 里山歩きと同時に、印西市内の市街地の景観ウォーキングの企画 • 剪定、花壇づくりの講習会 • 景観重要建造物・景観重要樹木の候補を公募する • 景観軸のシークエンス景観はどう考えるか • 計画の施行後はどう進めるのか	• インスタで景観をアップ • SNSを利用した景観計画の市民への浸透 • 草刈り前と後をSNSでアップ　ボランティア募集 • 地域間競争（成田市と印西市で草刈り対決） • ふれあいバスに音声ガイドを設置して文化財等を紹介する（魅力あるまちを紹介） • 景観ガイドマップ • 文化財の維持管理（協働） • 文化財ウォーク • 里山ウォーク • 調整池の水を抜く • 市民活動団体のコラボでまち歩き • 健康づくり、歴史や文化学習なども絡めた定期的なまち歩きイベントの開催 • 景観を絡めた歴史講義 • 市民での花畑づくり • 自宅・企業前の道路の雑草等を自発的に除去するシステムをつくる • 草刈りの自発的な手法	• 国道464号の草刈り • 国道464号の美化、景観向上のモデル化 • 地域ボランティア　高校の協力 • ごみ拾いをスポーツにする（エコマラソン） • 地域の盛り上げ • 住む人、働く人　地域を一緒に　高校もできること • 自分の家の前からきれいにしていく • 草刈りの前に道路（インフラ）整備をしっかり行う • ゴミゼロだけでなく、草も含める • モデル事業を行う • 住みやすさの＋α分は、住民にお願いする • リタイヤした世代のマンパワーを活用する • シニア、小中高大生も、小さい子どもたちも、外に出るイベント化と組み合わせる • 企業も自治会に入ってもらう（地域の活動を理解できる） • 景観は公共財という共通認識を市民間に育む方策
色彩について（今後の景観まちづくりに「生かせそうなこと、実施したいこと」	• 町会の色を決めるまたは市の色を決める • ハウスメーカー、設計業者等にチラシを配布 • 小中学校で講演 • 大学と連携 • 情報発信の方法（景観づくりの経過をいかに発信して市民に伝えられるか） • 景観に関する問い合わせ	• モデルエリアの設定（調和のとれた色彩の地区を発掘　実例があるとまねしやすい） • 日本を感じられる色を取り入れる • 公共建築物は必ず景観計画に沿って検討する • 公共施設（道路等）の景観への配慮の手引き • 色彩についての第一声は、誰が、どのように発するのか • 色彩を景観づくりに反映させるということがよくわからない • 計画策定後の改築に関する色彩の調整はどのように行うのか • 既設のものと新設のものの色彩の調和をどのように考えるのか • 印西市のイメージとなるカラーについて（イメージをまとめるにはどのようにするのか）	• 地域の子どもたちが企画・運営・管理を体験できるパブリックスペースの設定 • 公共施設ガイドラインを職員のワークショップでつくる • 公共建築物の整備（景観への配慮） • 自宅の塗り替え時に色彩を考慮する • ショッピングモール等での景観イベントの開催 • 景観について講演会の実施	
その他		• 「協力」はまず何をするのか（具体策を細かく出すのか） • 景観を活かして町おこしできるか（外国人観光客にアピール） • 行政側の規制等を住民側にどのように伝えるのか		• ニュータウンと旧市街の調和 • 旧と新の交流　イベント化